英文学読み直し（3）

——女性は果たして貞節か：ルネサンス期のフェミニストたち——

小　柳　康　子

I

男性にとって女性は，ギリシャ・ローマ時代以来，永遠の謎であった。このため古代以来連綿と「女性とはどのようなものか」が語られてきた。哲学者によって，詩人によって，キリスト教の聖職者によって。女性は彼らによって，あるときは「男を誘惑し，滅びに至らせる者」として貶められ，またあるときは「汚れなき美しい者」として賛美されてきた。この相反する女性観は，キリスト教以前の時代にまで遡って見られるものだが，これら二つの女性観が女性だけではなく男性にも強い影響を与えることになったのは，キリスト教の普及以来と言えよう。なぜなら，聖書の記述にある人間の祖先——アダムとイヴ——の創造と彼らの楽園追放を引き起こした罪を巡って，女性を貶める言説が古代末期の教父たちと中世カトリック聖職者たちによって繰り返されていった歴史があるからである。テルトリアヌス（c. 160-c. 225），アンブロシウス（c. 339-397）などの古代キリスト教教会の教父たちと中世カトリック教会の聖職者たちは，女性に対する激しい嫌悪と呪いの言葉を残している。イヴはアダムの脇腹から作られたという理由で，女性は男性より劣っているということが，また，イヴが誘惑に負けて神の禁止を破り，アダムをそそのかして人類の堕落の基を作ったということによって，女性は誘惑者であり，最大の罪人であるということが熱を込めて語られていた。このような女性蔑視，あるいは，女性嫌悪であるミソジニー——“misogyny”——は，社会の定数といえるまでに中世

には蔓延していた。女性はその祖先イヴにつながる性として，誘惑者であり，「貪欲な炎」であり，男性が避けなければならない存在であると数多くの文献が示している。この聖職者の言説には，現実の女性から隔離された修道院という場所で，未知なる性である女性の定義をする個人としての男性の姿とともに，ヨーロッパ・キリスト教社会の，またカトリック教会それ自身の大きなある意図があったのは言うまでもない。

しかし中世においてはまた同時に，12世紀ごろから「マリア崇拝」という，キリストの母マリアを褒めたたえ，賛美するという現象が起こった。この聖母マリアへの崇拝は，女性の肉体が汚れない清らかなものであるという考えをその中に持っていて，イヴの存在のありようとは対極をなす「汚れなき母」という，パラドクシカルな女性の原型が作られて行ったのである。罪を犯していない清らかな肉体に象徴される処女性への賛美は，女性を肉欲に支配され，汚れ切ったイヴの末裔であると嫌悪する言説とは相反する動きのように見えながら，実際は，同じ根から発しているものだと言えよう。すなわち，現実の女性とは異なるものとして練り上げられて行ったこれらの二つの女性観は，同時に，現実の女性を封じ込めるための装置としての役割をも果たしたということである。

処女性の優位が強固なイデオロギーとして確立していったことは，しかし，結婚が教会の秘跡となってゆく12世紀以来，結婚と処女性の一筋縄では行かない関係を生み出した。つまり，結婚が教会の仲立ちにより神聖なものとして認められて行くことと，結婚生活における夫と妻の肉体の交わりと女性の処女性を重要視することとの間をつなぐ理論が必要にされたということである。これをどのようにカトリック教会がさばいて行ったのかは極めて興味のある問題であるが，これはあまりに大きなテーマなので，ここでは，結婚生活における夫婦間の過度の肉体の交わりが教会によって淫乱と見なされていたことだけを指摘しておこう。――「実際，結婚は神の意にかなうものではない。人々を動物のように淫乱と快楽に駆り立て，

馬やロバのように逸楽にふけることをそそのかすことなのだ。」（カンブレのジェラール――11世紀）（ジョルジュ・デュビー：『中世の結婚――騎士・女性・司祭』）

以上を要約してみると次のようになるであろう。すなわち，中世ヨーロッパにおいては，女性が肉体の比喩でありそれゆえ淫乱で男性を堕落させる悪の化身であるという考えと同時に，女性は清らかで純潔な存在であると言う考えも広められたということである。これらの相反する女性のイメージは，生身の女性の姿を視野に入れる事なく，女性抜きで男性だけによって広められてきた。そして貞節という徳は，もちろん女性を汚れなき存在と見なす考えに結び付いているのは言うまでもない。果たして女性はこのどちらの存在なのであろうか。今現代に生きている我々がこれを問われれば，答えは当然そのどちらでもないというものになるだろうが，考えなければならないのは，このように繰り返し女性のイメージが男性によって流されて行ったことの意味と，このことが現実の女性たちと彼女たちが関わる男性たちとの関係にどのような影響を与えたのかということである。

II

さて，この二つの女性観を踏まえて，女性の貞節を巡るルネサンスの女性論争とこの論争に参加した女性たちについて考えてみる。本論でのルネサンスは，イギリスの薔薇戦争（*Wars of Roses*, 1455-85）の後王位についたヘンリー７世に始まるチューダー王朝からジェームス１世に始まるステュアート王朝までの，16世紀初めから17世紀半ばまでを指している。この時期はイギリスという国が，ヨーロッパの外れの小国からスペインやイタリア，オランダ，フランスなどの大国と並び立つ近代国家として発展して行った時期であったのは言うまでもないであろう。

このルネサンス期のイギリスにおいても，中世以来の女性論争があったが，そこには前の時代とは異なる様相が見られた。すなわち，女性論争が

聖職者の手から離れて，人文主義者たちや，学問を身につけた中産階級の人々という俗人の間で盛んに行われるようになったということである。そしてその形態も，たんなるモノローグ的な自閉的空間から，二つの本質を巡るディベイトへと変わっていった。そして，女性を徹底的に貶める書物が出版されると，すぐに女性の素晴らしさを極端に主張する反論が出版されるという形で，この論争は延々と続いていったのである。これらは普通，ページを簡単に綴じ合わせただけのパンフレットと呼ばれている形態で出版されていた。ちなみにこのようなパンフレットの形態はこの時代の出版物の一つの特長であり，女性論争だけではなく他の多くのテーマについてのパンフレットが出されていた。

女性を貶めるパンフレット——女性蔑視・ミソジニーのパンフレット——に見られる女性への悪口には大体決まったパターンがあった。これを女性のステレオタイプとよぶ批評家もいる。女性は「がみがみ屋」(“shrew”)で，「うぬぼれで虚栄心が強い者」(“vain”)で，そしてなにより「誘惑者」(“seductress”)，すなわち，その肉体の魔力で男を惑わす者であるというものであった。この女性のイメージはすでに述べた通り，古代，中世の宗教的背景をもつ女性観の一方のもので，ルネサンスになって新しく作り出されたものではない。そして言うまでもなくこのような女性は，貞節とは程遠い，性的に放縦な女性と考えられていたのである。

女性の素晴らしさを褒めたたえるものは，女性弁護，あるいは，女性擁護のパンフレットといわれている。なぜならおおむねこれらは，女性蔑視のパンフレットが先に出された後でその反論として，女性の卓越性を証明し悪口を書いた作者をやりこめるために出版されたからである。これらのパンフレットにおいてはもちろん，女性は貞節であると主張されている。そのほかの女性の徳は，謙譲，献身などのいま私たちが女性に特有な性質と思いこまされているものであった。

女性の本質を巡るこれらの論争は，ほとんど男性によって行われてきた

が，イギリスにおいてJane Angerが女性として初めて女性擁護のパンフレットを書いた1589年より180年ほど以前に，歴史上初めて女性擁護の書物を書き出版した女性が海を越えたフランスにいた。それはイタリア生まれでシャルル5世の宮廷で活躍したクリスティーヌ・ド・ピザン（Christine de Pizan : 1365-c. 1430）である。彼女は夫の死後子供を育てるために物を書き始め，『女の都市』（*The City of Ladies* : 1405）という本では，ミソジニーを激しく非難し，女性の卓越を語っている。そして重要なのは，貶められてきたイヴを汚辱の淵から救い出し貞節を強調していることである。彼女のこの主張は，これから見て行くルネサンスの女性たちのパンフレットと共通するものを持っている。

女性蔑視の書物や女性擁護の書物の書き手はほとんど男性だったため，彼らはこれが文学ジャンルであり，一種の知的ゲームであるというある暗黙の認識を持っていたように思われる。従って論の進め方は，古典のレトリックである修辞学あるいは雄弁術に基づいていた。さらにその内容である女性の本質論に説得力を持たせるためのテクニックにも決まったやり方があり，exemplaと呼ばれる典型を示すのが常であった。神話や聖書，さらにはギリシャ・ローマ時代の歴史に名前を残している女性がフィクションと現実の区別なく集められ，熱を込めて語られている。

エリザベス女王即位以前の1540年に出版された人文主義者Sir　Thomas Elyotの『善女の擁護』（*The Defence of Good Women*）以来ルネサンスの女性論争が盛んになったが，この論争が特に白熱してパンフレット戦争と呼ばれるほどになったのは，ジェームス1世時代の1615年に出版されたフェンシング教師Joseph Swetnamの『色好み，怠惰，強情，不実の生き物女性の糾弾』（*The Arraignment of Lewd, idle, froward, and unconstant women*）を巡ってであった。以前からあった女性論の内容に当時流行の文学作品からの切り取りを継ぎ合わせたこのSwetnamのパンフレットは，1637年までに10版を重ねたほどに非常な人気を博し，ルネサンスの女性論争に重要な

意味を持つことになる。なぜなら，彼の激しいミソジニーの言説に反論を加えるために，この女性論争に女性が集団で参加したからである。Rachel Speght, Esther Sowernam, Constantia Munda がそれであり，彼女たちは Swetnam を激しく非難する中で，互いにそれぞれの仕事を理解しあい，また不足を補いながら女性のライティング・ネットワークを作り上げて行ったのである。この意味で，Swetnam の『女性の糾弾』は女性たちからの叱責を浴びることにはなったが，これら3人の反論を生み出すための苗床の役割を果たしたという意味で，書かれてよかったと感謝しなければならないものだったと言えるかもしれない。これら3人の女性はそれぞれのパンフレットの前書きの中で，女性の美徳である沈黙を自分たちのふさわしいものと認めつつも，それをあえて破ってまでものを書くようにさせた Swetnam への激しい憎悪と呪い，軽蔑を明らかにしている。

彼女たちの女性擁護を，女性が男性とおなじ土俵でのゲーム参加したと考える批評家もいるが，筆者は，Swetnam の罵詈雑言に堪忍袋の尾を切らして立ち上がったという彼女たちの言葉を信じたい気持ちがしている。もちろん，女性論争の一方の陣営に組しているのだという意識を彼女たちが持っていたことは確かではあるが。ここでは女性の貞節は，自分たちの存在の基礎をなすほど重要なものとして考えられている。

III

さて女性たちの沈黙を破らせるほどにひどい悪口に満ちていた Swetnam のパンフレット『好色，怠惰，強情，不実の生き物女性の糾弾』とは，一体どのようなものだったのであろうか。正式のタイトルは，『好色，怠惰，強情，不実な女性の糾弾あるいはその虚栄，お好きなほうをどうぞ。賢明，有徳，貞淑な女性への賞賛つき。結婚している男性には楽しく，若い独身者にはと有益，どなたにも無害』（*The Arraignment of Lewd, idle, froward, and unconstant women or the vanity of them, choose you whether, With a*

Commendation of wise, virtuous, and honest Women, Pleasant for married Men, Profitable for young Men, and hurtful to none）という長いものである。ちなみに，この時代の作品の題名は内容を要約した副題をつけることが多く，非常に長いのが常であった。結婚している男性を喜ばし，若い独身の男性には有意義で，誰をも傷つけないと Swetnam が書いていることから，彼がどのような意図を持っていたのかは明らかである。つまり彼はここで女性に対する身の処し方を説教するのではなく，男性たちにまじめとは言えない楽しみを，すなわちジョークを提供しようとしているのである。彼は「最も優れているのでもなく最も悪いのでもない，普通の女性の方々へ」（"Neither to the best nor the worst, but to the common sort of Women"）と題された前書きで，自分がこれを書くに至ったのは個人的に女性からひどい仕打ちを受けたからであると動機を説明し，自分の内容の正当性を主張しているが，このようなスタイルは当時の常套的な方法であった。――「私は女性たちにひどい仕打ちをうけて怒っている。これに男は黙ってはいられない。君たち女性がひどいことをしたのだから，ほめ言葉を期待しても無理というもの。」（"I being in a great choler against some women (I mean more than one) ; . . . Wronged men will not be tongue-tied ; therefore if you do ill, you must not think to hear well."）

Swetnam の議論は女性がいかなる目的のために作られているのかで始まる。彼は聖書のモーゼを引き合いに出しながら自分の言葉に権威を持たせてゆくのであるが，そのすぐ後でこの意味を強引にねじ曲げ，男性にとっての災難である女性の姿を強調する。その言葉はこうである。――「女性はそもそも，男性のを助け手――helper――として創造された。…まさにそうだ。なぜなら，女性は男が苦労して得た金や物を，どんどん消費する助けとなるのだから。」（"At the first beginning, a woman was made to be a helper unto man. . . . And so they are indeed, for she helpeth to spend and consume that which man painfully getteth."）

また女性の祖先であるイヴがアダムの脇腹から造られたという聖書の「創世記」の記述は，Swetnam にかかっては女性のつむじ曲がりの原因にさせられてしまうのだが，これはもちろん，古代末期から中世にかけたカトリック教会の女性蔑視の言説の根幹をなすものであった。――「女性は，男性の肋骨から作られた。このため女性の性質はその肋骨のようにねじ曲がっていて，ちょっとしたことでも荒れ狂う。」(“They [women] were made of the rib of a man, and that their froward nature showeth ; . . . and women are crooked by nature, for small occasion will cause them to be angry.”)

そして Swetnam はこのようなものとして創造された劣等な性である女性こそ男性を滅ぼす源であるとして，激しく女性を糾弾してゆくのである。女性は「恩知らずで，不正を行い，男性をを欺く者。不実で，怒りっぽく，軽薄で，むっつり，高慢で，無作法で，残酷な者」(“They are ungrateful, perjured, full of fraud, flouting and deceit, unconstant, waspish, toyish, light, sullen, proud, discourteous, and cruel.”) であると。また女性はなにより「男性にとって危険な生き物で，狡猾で本心を隠し，美しい姿と顔によって男をだまし，その言葉で男を魔法にかけ滅ぼす者」(“Thus women are cunning dissemblers ; . . . women are subtle and dangerous for men to deal with, for their faces are lures, their beauties are baits, their looks are nets, and their words charms, and all to bring men to ruin.”) であると。これを語る Swetnmam の陰には，長い年月にわたり多くの男性によって流されてきたミソジニーが存在しているのは言うまでもないことである。

Swetnam のパンフレットは，このような女性蔑視の言葉を書き連ねて女性を糾弾するだけに終始しているのではない。Swetnam はこれを男性にむけて書いているつもりなので，彼は本来的にこのような邪悪な女性との結婚生活がどのようなものであるか，また，結婚するときはどのような女性を選んだらよいかにも多くの紙面を割いている。彼の興味は妻に物をせがまれる夫にあるようで，これから結婚する男性たちに結婚生活における夫

の惨めさを次のように強調している。――「女性は夜のカラス。夜のベッドで，昼に頭に浮かんだほしい物をせがむ。…最新のガウン，薄い布地の下着，粋な帽子。…苦しい財布の中身を考えたら，こんな要求をかなえるのは無理。でも自分の安眠確保のために，夫は妻の要求を飲む。結婚している男ならみな，女性が欲しいものを得るまでは決しておとなしくならないことを知っている。」（"Women are called night Crows for that commonly in the night they will make request for such toy as cometh in their heads in the day, for women know their time to work thier craft. . . . she makes request for a gown of the new fashion stuff, or for a petticoat of the finest stamell, or for a hat of the newst fashion ; . . . he yieldeth to her request, although it be a grief to him for that he can hardly spare it out of his stock. Yet for quietness sake he doth promise what she demandeth, partly because he would sleep quietly in his bed. Again, every married man knows this, that a woman will never be quiet if her mind be set upon a thing till she have it.")

このように結婚生活は悲惨なものであるが，男性はともかく結婚しなければならないのだから，彼はそれなら少しでもこのような惨めさを軽減させようと現実的な結婚へのアドヴァイスを示す。――「若い男にとって結婚するのに最もよい時期は25歳の時だ。妻には17歳前後の寡婦ではない娘を選ぶがよいい。寡婦はほかの男に合わせられているので，それを変えるのは大変で君の苦労は二倍になる。なぜなら，今までの習慣を取り除き，以前の堕落した生活の仕方を忘れさせなければならないからだ。だがこれは非常に難しい。年若い女性は柔軟性があり柔順で，夫がしたいことやうれしいことには何でも喜んで従うものだ。」("The best time for a young man to marry is at the age of twenty and five, and then to take a wife of the age of seventeen years or thereabout, rather a maid than a widow, for a widow she is framed to the condition of another man and can hardly be altered, so that thy pains will be double. For thou must unlearn a widow and make her

forget and forgo her former corrupt and disordered behavior, the which is hardly to be done. But a young woman of tender years is flexible and bending, obdient, and subject to do anything according to the will and pleasure of her husband.")

このSwetnamの若い女性を選べというアドヴァイスには，現代においても依然として男性の深層にある結婚相手への望みと相通じるものがあるように思われる。更に彼が言及している未亡人——寡婦——の姿にも注目したい。事実彼は稿を改めてこの寡婦との結婚について詳しく語っているのである。

「熊いじめ，あるいは寡婦の虚栄について」("The Bearbaiting or the Vanity of Widows, Choose you whether") という題の付録で，Swetnamは，寡婦と結婚する危険性を戒めている。寡婦は頑固で他人の言うことには耳を貸さない上に，以前の堕落した澱を取り除かなければならない存在であり，しかも悪徳に満ちた悪魔の手先だというのである。彼女は夫を言い負かして主導権を握ろうとし，その大声を聞くと悪魔が地獄から現れたかと思うほどである。いかに多くの男性が財産に目が眩んで寡婦と結婚し，惨めな一生を送る羽目になったことであろうか。寡婦は「七つの大罪」を全部あわせた存在であり，地獄の門なのである。——"For they are the sum of the seven deadly sins, the Fiends of Satan, and the gates of Hell."

寡婦をこのように女性の中でも特別にひどいものと扱っているのは，もちろんSwetnamの発明ではない。ここには，ヨーロッパにおいて女性がその性的な関係を基にして処女，妻，寡婦という三つのカテゴリーに分類されてきた長い歴史の反映が見られるからである。女性はイヴの末裔としての誘惑者かマリアのような汚れ無き存在かという二つの女性観の基層の上に，さらにその性経験によって三つの項に分類されていた。男性達が女性を支配し管理しやすいようにである。処女が一番上で寡婦がその次，結婚している女性である妻は一番劣るものとされていたが，Swetnamがここで

妻ではなく寡婦が最も忌まわしい者としていることに注目したい。この変化は夫婦を単位とする家族の果たす役割がルネサンスにおいて，イギリスの近代国家としての発展に必須のものとなっていった歴史的状況の反映が見られるのではないだろうか。寡婦という夫と妻を単位とする核家族から切り離されたいわば家族とのつながりをたたれた存在への疑念が，中世では妻，母より上に位置していた地位から転落させられていることの意味なのではないかということである。

Joseph Swetnam の『女性の弾劾』は，男性から男性にあてられた一種のジョークであり，女性の本質についての伝統的な意見と結婚生活へのアドヴァイスがごたまぜになった，まとまりのある構成を欠いたパンフレットであった。女性は貞節ではなく淫乱で，手におえない頑固者なのだから，結婚相手の選択には十分に気をつけ，結婚した後は夫の役割を妻にたいして果たすことが大切であるという彼の主張は，伝統的な女性論の延長を踏まえながら，中世の聖職者達には見られなかった現実生活，すなわち，近代市民社会の市民である男女の姿を想定して書かれていることがうかがわれる。古代以来の女性論が，ルネサンスに至り社会の変化に応じて広がりを持つようになったということである。とすればこの先，時代が19，20世紀と進んでゆく中で，このミソジニーが社会の中で形を変えて生き残ってゆく可能性は大いにある。現代に生きる我々は，このミソジニーの呪縛から果たして自由であろうか？

さらにまたこの近代市民社会の市民である男女の姿の生態は，シェイクスピアやベン・ジョンソンをはじめとするルネサンスの多くの劇作家達の戯曲にもはっきりと見られるものである。女性論争を知った上でこれらの劇作家の作品を読むとき，英文学の面白さが増してゆくのはいうまでもないだろう。

IV

さてこのSwetnamの程度の低いミソジニーに対して三人の女性が真っ向から立ち向かった。一番手はRachel Speghtで，彼女は『悪口屋への口輪』(*A Mouzell for Melastomus*)(1617)を書いた。正式の題は次のようなものになっていて，彼女の意図がSwetnamへの明白な反論だということが分かる。――『悪口屋の口輪：エヴァの末裔に吠える犬，口汚い罵り犬，あるいは『女性の糾弾』と題されたジョゼフ・スウェトナムの不敬で無知なパンフレットを受けての答え』(*The Cynicall Bayter of, and foule mouthed Barker against Evahs Sex ; or, An Apologeticall Answere to that Irreligious and Illiterate Pamphlet made by Io. Sw. and by him Intituled, "The Arraignement of Women*)

Rachel SpeghtはJames Speghtという牧師の娘で，これを書いたときはまだ20歳にもなっていなかった。彼女はこのほかに1621年に寓意詩*Moralities Memorandum, with a Dreame Prefix'd, Imaginarie in Manner, Reall in Matter*を書き，この中で最初の作品である『悪口屋への口輪』が父親により書かれたという非難を否定している。Speghtの生涯については，William Procterというgentlemanと1621年に24歳で結婚し，二人の子供を設けたということ以外知られていない。しかし，女性が教育を受けものを書くことの困難な時代に，このように男性の間のジョークともいえるまでに蔓延していた女性蔑視の言説に異を唱え，女性のための弁護を実名で発表したことの意味は決して小さいものではない。

Speghtは，すべての女性たちにあてた献呈の中で，自分が反論せざるを得なくなった事情を自らの女性の戦闘家のイメージで提示している。このような女性への敵にたいして沈黙を守っていると相手は自分が勝ったと考えてさらにひどい攻撃を仕掛けてくるだろうから，自らすべての女性のために立ち上がったのだというのである。――「私のこの弁護は，自分がほ

かの人々よりこの仕事に一番ふさわしいと考えたからではなく，女性のうちの誰もこのひどい敵に対して立ち上がっていないからなのです。私は真実で武装し，神の御言葉と徳高い人々の生きた姿とを盾に持っているので，敵との戦いにいささかも恐れを感じてはおりません。この戦いで賢明な皆様方によって私が勝利したと見なされて傷つけられて来た方々に満足を与えられますならば，私は狙った的を射ぬき，望んだ褒美を得たということになりましょう。」（"This my briefe Apologie (Right Honourable and Worshipfull) did I enterprise, not as thinking my selfe more fit then others to vundertake such a taske, but as one, who not perceiuing any of our Sex to enter the Lists of encountring with this our grand enemy among men, I being out of all feare, because armed with the truth, which though often blamed, yet can neuer be shamed, and the Word of Gods Spirit, together with the example of vertues Pupils for a Buckler, did not whit dread to combate with our said malevolent aduersarie. And if in so doing I shall bee censured by the iudiciois to haue the victorie, and shall haue giuen content vnto the wronged, I haue both hit the marke whereat I aymed, and obtained that prize which I desired."）

ここに見られる女性でありながら剣を持って戦う戦士のイメージは，100年戦争で国難を救ったフランスの Joan of Arc (1412-31) を思い出させるが，女性の戦士はルネサンスの文学ではなじみのものであった。例えば，Edmund Spenser の『神仙女王』（*The Faerie Queene* : 1596）の第三巻のヒロインである Britomartis は「貞節」を表す女性戦士であったことを思い出してみるがよい。たぶん Speght はこの Britomartis を知っていたのは確かであろう。なぜなら Speght は自分の戦いを「邪悪な心とひどい言葉を吐く舌により悪魔の書記になった」Swetnam への正義の戦いという，キリスト教的枠組みの中で捉えているからである。

Speght の強い宗教心は，彼女が牧師の娘であったせいだと思われる。そして女性の素晴らしさだけでなく，神の完全性をも証明しようとする意図

はそのため，女性を男性より弱く脆い性とする中世以来のキリスト教の教義をうちだくものとなっている。もちろんこれによってSpeghtが，男性のミソジニストたちのように女性の弱さと女性の肉欲への貪欲さをつなげているのではない。反対に，女性の弱さゆえの誤りを判断力に優れた男性が阻止しなかったところに間違いがあったという，今の我々から見れば一種の責任転嫁のような論理を展開して行くのである。すなわち彼女の議論の明白なキリスト教的枠組みは，Swetnamをはじめとする多くの女性蔑視の書に見られる女性のひどさを保証するあの創造神話を，女性の素晴らしさと神の完全性を意味するものに変えているということである。

神はアダムの「助け手」としてイヴを彼の眠っている間に作り，それによって男性も女性も神の被造物としての価値を獲得したというのである。この論理を推し進めるためにSpeghtは，この矛盾を突いてくると思われる四つの反対意見をまずあげ，それらに一つ一つ反駁を加える。

1．「女性は良き者として作られたが，サタンの誘惑に耳を貸してしまい，彼女の子孫の全てに死と苦しみをもたらした。」(“Woman, though created good, yet by giuing to Sathans tempations, brought death & misery vpon all her posterity.”)

2．「アダムではなく，女性であるイヴが欺かれたのであり，道を誤ったのだ。」(“Adam was not deceiued, but that the woman was deceiued, and was in the transgression.”)

3．「聖パウロは，人(男)が女性に触れるのは良くないといっている。」(“Saint Paul saith, It were good for a man not to touch a woman.”)

4．「ソロモン王は，千人の男性の中に良き人間を一人は見出すことができるが，女性の中には一人も見出せないといっている。」(“Salomon, who seemes to speake against all of our sex ; I haue found one man of a thousand, but a woman among them all haue I not found, whereof in it due place.”)

このうちで最も本質的なものは第一番目で，Speght 自身も一番長い反論をしている。Speght は女性蔑視の根拠であるサタンによるイヴの誘惑を次のように説明しているのである。「サタンが女性を始めに誘惑したのは，生け垣が最も低いときにそれを越えることがたやすいからでした。つまり，女性が男性より弱い器なので誘惑するのが容易だったからです。…アダムがイヴの上に立つ者で強い器なのだから，彼はイヴの勧めを受け入れずにたしなめるべきでした。」（“Sathan first assailed the woman, because where the hedge is lowest, most easie it is to get ouver, and she being the weaker vessel was with more facility to be seduced: . . . hee being her Head would haue reproued her. . . .”）

Speght は 2 から 4 に対しても極めて明確な答えを用意しており，彼女が論理的に物事を論じてゆく教育を受けたのではないかということを感じさせる。しかしここに見られる答えから解るように，彼女の女性擁護は現代の我々がフェミニズムという言葉に込める期待を満足させるものではない。宗教の枠組みを基に据えている限り，Speght の反論はあくまで男性が女性の頭であり，女性は弱い器として強い器の男性に導かれていく存在であるという認識を自明の前提としているからである。これは女性の卓越性——excellency——を四つの原因により述べてゆく部分にもはっきりと反映されている。

Speght は，女性の卓越性を，次のように分けて説明している。1．「それを作り出した原因」（“the efficent cause of womans creation”）2．「それらが作られている物質あるいは組成」（“the material cause, or matter whereof woman was made”）3．「それが出来上がっている外的形象」（“the formall cause, fashion, and proportion of woman”）4．「それが作られた最終的な目的」（“the final cause, or end, for which woman was made”）

例えば，1 の「女性を作り出した原因」については，「永遠なるエホヴァ」（“Iehouah the Eternall”）がその答えであるのは言うまでもない。また，2

の「女性が作られている物質あるいは組成」の答えもなかなか興味を引くもので，Speghtは，他の女性擁護の書に見られる答えを使いながら，さらに彼女独自の見解を付け加えている。――「女性は土塊から作られた男性から作られました。この時の男性は既に生きた魂でした。従って，女性のほうが男性よりその組成は純度が高いのです。その上，女性はアダムの足から作られて彼よりはるかに劣っているのではなく，また頭から作られてアダムの上に立つのでもなく，心臓に近い脇腹から作られたのですから男性と対等――equall――なのです。」（“woman was made of fine mould : for man was created of the dust of the earth, but woman was made of a part of man, after that he was a liuing soule : yet was shee not poroduced from Adams foote, to be his too low inferiour ; nor from his head to be his superior, but from his side, neare his heart, to be his equall : ”）

このようなSpeghtの自明の前提である階層的な男女関係は，しかし，共に愛しあう夫婦の理想と矛盾するものではない。女性は神の栄光をたたえるために，また男性の「助け手」として作られたのだから，夫婦は互いに相手を思いやり協力しあう必要があるのである。Speghtはこれを次のように述べている。――「女性は又，男性の助け手として仲間として作られました。しかしもし女性がただの助け手だけに止まって，家事一切を総てその肩に担うのであれば，夫こそ責められるべきです。なぜなら，夫婦は重荷を担う同士として，互いに相手の悩み，苦しみ，不幸の一部を分かち持たなければならないからです。しかし二頭の牛が一つのくびきに繋がれて仕事をする時大きくて強いほうが重い荷を担うように，夫の方が強いのだから妻より多くの重荷を背負わなければなりません。」（“The other end for which woman was made, was to be a Companion and helper for man ; and if she must be an helper, and but an helper, then are those husbands to be blamed, which lay the whole burthen of domesticall affaire and maintenance on the shoulders of their wiues. For, as yokefellowes they are to sustayne

part of each others cares, griefs, and calamities : But as if two Oxen be put in one yoke, the one being bigger then the other, the greater beares a most weight ; so the Husband being the stronger vessell is to beare a greater burthen then his wife ; ”)

Speght のこのような男性が女性より強く優れているという聖書に立脚した場所からの女性擁護は，二番手の Sowernam にも批判されている。またこれはルネサンスの女性のライティングをその後の歴史を視野に入れて考える時，男女の違いを盾にとって女性を家庭に閉じ込めようとするイデオロギーと繋がる危険性があるということは確かに言えるだろう。

Speght はこの後，一種の appendix である「女性いじめのお方への幾つかの質問」（“*Certain Qvareres to the bayter of Women*”）をつけて，Swetnam の文法，文体上の誤りと聖書の内容の理解の誤りを具体的に彼のパンフレットのページと行をあげながら誤りを正して行く。彼女は「読者の皆様へ」という献呈で自分の勉強に言及しているが，ここにはルネサンス時代に若い女性がどのような形で知的に生きようとしたのかが，謙遜と自信の混じりあった言葉の端々に窺われて興味深い。――「私は年若く知識の面でも不足しております。私の学問はほんとうに小さなもので，私は，女性という私の性に課せられている仕事の合間に暇を見つけて勉強して参ったのです。とは言いましても，私はあの学のある方々の行う反論の方法を知らない訳ではございません。しかしながらこの女性への熊いじめは，文法の間違が多く全体の構成も目茶苦茶で，恥ずかしげもなくあちこちの本の中身をつぎはぎしたものなので，形にのっとった普通の反論などしても意味がないでしょう。…その中に多く見られる彼の愚かしさに真面目に反論するのは小さな蚊を罠でつかまえるようなことになりましょう。…しかし彼にもうこれ以上女性の悪口を書かないようにさせるため，ここであえて彼の内容上の間違いに反論を提出し，それを書いたことに恥ずかしい思いをさせるのがよいと思われます。」（“Although (curteous Reader) I am young in

yeares, and more defectiue in knowledge, that little smattering in Learning which I haue obtained, being only the fruit of such vacant houres, as I could spare from affaires befitting my Sex, yet am I not altogether ignorant of that Analogie which ought to be vsed in a literate Responsarie: But the Beare-bayting of Women, vnto which I have framed my apologeticall answere, beeing altogether without methode, irregular without Grammaticall Concordance, and a promiscuous mingle, it would admit no such obserued in the answering thereof, as a regular Responsarie requireth.... His absurdities therein contayned, are so many, that to answere them seuerelly, were as friuolous a worke, as to make a Trappe for a Flea,... Yet to preuent his hauing occasion to say, that I speake of many, but can instance none, I haue thought it meete to present a few of them to his view, as followeth, that if Follie haue taken roote in him, he may seeke to extirpate it, and to blush at the sight of that fruit, which he hath already brought foorth: ")

牧師という知的階級に属する家に生まれたとはいえ，貴族階級の女性とは異なり多分それほど深い教育を受ける機会に恵まれなかったであろうSpeghtが，まだ20歳にもなっていない時に男性の書に対してこのような知的戦いを挑んでいるのは，驚くべきことといってもよいであろう。この他にもルネサンス時代には，今まで知られていなかったあるいは研究されて来なかった多くの女性たちが残されている。女性のライティングの歴史の研究はそれゆえ，まだまだ大きな可能性を孕む領域と言うことができるのである。

V

このSpeghtから少し遅れて同じ1617年に，Esther Sowernamの反論『エステルによるハマンの絞首刑，あるいは「女性の糾弾」という題の無学なパンフレットへの解答』が出版された。正式なタイトルは次のようになる。

――『エステルによるハマンの絞首刑，あるいは「女性の糾弾」と題された無学なパンフレットへの回答。好色，怠惰，頑固，不実な男性と夫の召喚つき。1部と2部：1部は，聖書を基に女性の卓越と価値を証明。2部は，毎日の行動の素晴らしさを男性に認められた古代異教時代の女性の見積もり。エスター・サウァナム著。娘でもなく，妻でもなく，寡婦でもなくそれらすべてなので，全部の擁護ができる経験豊かな女性』(“*Esther hath hanged Haman ; or, An Answer to a lewd Pamphlet entitled The Arraignment of Women, With the arraignment of lewd, idle, froward, and unconstant men and Husbands. Divided into two Parts : The first proveth the dignity and worthiness of Women out of divine Testimonies ; The second showing the estimation of the Feminine Sex in ancient and Pagan times, all which is acknowledged by men themselves in their daily actions. Written by Esther Sowernam : neither Maid, Wife, nor Widow, yet really all and therefore experienced to defend all.*”）この題名は，言うまでもなく旧約聖書の「エステル記」の記述を基にしている。

Esther Sowernam という偽名は Swetnam を反対にしたもので，さらに聖書の中のヒロインと悪辣な男を自分と Swetnam に重ね合せ，女性による悪辣な男性の処刑を，つまり，女性の勝利を暗示しているのが容易に見て取れよう。また自分を「娘，妻，寡婦のいずれでもなくその全てであるので全ての擁護をできる経験を積んでいる」(“neither Maid, Wife, nor Widow, yet really all therefore experienced to defend all”）と規定していることは，既に述べた女性の三つのカテゴリーへの言及である。これを彼女が全部を経験していた，つまり，結婚して今は寡婦となった女性であると単純に取ることもできるが，筆者は，Sowernam が自分たち女性をこのように分類することへの批判を込めてるのだと考えたい。つまり Sowernam は，女性を三つのカテゴリーに都合よく分類してきた男性支配の文化への批判を込めているのではないかということである。

Sowernamの女性たちへの献呈は，自分がこれを書くことになった動機を個人生活とSpeghtに言及しながら述べていて興味を引かれる。なぜならここにはSpeghtの反論への言及が見られ，それを批判しつつ継承するという態度を彼女がとっているからである。女性のライティングが，また女性の書き手同士がこのように結び付いていることに大きな意味をみたいと筆者は考えている。——「この前のミカエルマス開廷期(“Michaelmas Term”)にロンドンへ参って，男女の数が丁度半分ずつでしたが，友人たちとの夕食の折りのことでした。このような時には女性についての話題ほどふさわしいものはありませんので，皆でこれについて大いに話が弾みました。ある方は女性擁護を，またある方は女性非難をなさいました。その時，ちょうどSwetnamの『女性の弾劾』のことが話題になり，私はまだそれを読んでおりませんでしたので少し興味を持ったのです。その翌日，前夜同席していた一人の殿方がそれを届けて下さいましたので早速目を通してみますと，その題名から程遠い中身と書かれていることのあまりの酷さを知りました。」(“Right Honorable and all others of our Sex, upon my repair to London this last Michaelmas Term, being at supper amongt friends where the number of each sex were equal, as nothing is more usual for table talk there fell out a discourse concerning women, some defending, others objecting against our Sex. Upon which occasion, there happened a mention of a Pamphlet entitled *The Arraignment of Women*, which I was desirous to see. The next day a Gentleman brought me the Book, which when I had superficially run over, I found the discourse as far off from performing what the Title promised as I found it scandalous and blasphemous.”)

こう書き出したSowernamは，Swetnamをやりこめるために自分で反論を書き始めたことを語ってゆく。——「いくらか書き進んだ頃，このパンフレットへの反論である女性の弁護が牧師の娘によって書き上げられて出版を待つばかりだと知りました。私はこれを聞いてペンを置いたのです。

他の女性が書いてくれたのなら私の女性弁護の必要はあるまいと思ったからでした。さてこの娘の本が出版された後，読んでみますと，私の感じましたのは，作者が何度も口実にしている若さのゆえとは申せ，答えとしては短くて生ぬるすぎるということでした。女性擁護のはずが，女性の非難になっている所まである始末です。そんなわけで，一度はしなくてよいと思った仕事にまた取り掛かった訳です。今度は私の仕事が二つになりました。一人に答えることと，もう片方の不足を補うこととの。」(“Whereupon I, in defense of our Sex, began an answer to that shameful Pamphlet; in which, after I had spent some small time, word was brought me that an Apology for Women was already undertaken, and ready for the Press, by a Minister's daughter. Upon this news I stayed my pen, being as glad to be eased of my intended labor as I did expect some fitting performance of what was undertaken. At last the Maiden's Book was brought me, which when I had likewise run over, I did observe that whereas the Maid doth many times excuse her tenderness of years, I found it to be true in the slenderness of her answer.... So that whereas I expected to be eased of what I began, I do now find myself double charged, as well to make repley to the one, as to add supply to the other.”)

この言葉から既に述べたように，Swetnam のパンフレットを巡って女性たちが結び付いていることが知られよう。

Sowernam は Swetnam に対してまじめに反論しているだけではなく（たとえば彼女は，女性が夫の稼ぐものの消費を助けるために作り出されたとする，あの女性 helper 説を真剣に否定している）Speght の議論を補足しながら，女性の卓越性を述べてゆくのである。Sowernam のパンフレットは 2 部に分れていて，1 部は創造物語におけるイヴの名誉回復とそのイヴを創造した神の偉大さの証明をすると言う線で貫かれている。Sowernam によれば，アダムはイヴが造られて初めて完全な存在になったのである。——

「アダムはまだ完全ではなかったので，神は助け手を与えたいと思いました。そのため神は女性をお作りになり，それを神の最後の創造物としたのです。不完全な男性を完全な者にするために。女性が作られるまでは，男性は完全ではありませんでした。」("Yet Adam was not so absolutely perfect but that in the sight of God he wanted an Helper. Whereupon God created the woman, his last work, as to supply and make absolute that imperfect building which was unperfected in man, as all Divines do hold, till the happy creation of the woman.")

しかし彼女のパンフレットでのハイライトは，Swetnam と彼と同罪の全ての「怠惰で，気の触れた，頑固で，好色な」男性たちを裁判にかける場面であろう。Swetnam は「理性と経験」という二人の裁判官の前に連れ出されて，身内で仲間である彼自身の「五感と七つの大罪」を陪審員とし，Sowernam によって長い告発の形で読み上げられてゆく彼の罪状を聞くのである。この告発では，女性はその肉体においてはきゃしゃで柔らかく美しい存在であり，また精神も穏やかで柔順で徳高い存在であることが強調されている。従って，今まで男性に言われてきているように，好色で淫らでなどは決してないのだと言うことが力説されるのである。むしろ非は男性にあり，Sowernam は彼が先に誘惑しなければ，女性の堕落はないと言い切っている。「男性は，相手の気持ちをくみ優しいという女性の性質を利用して，望みが叶えられないならば身を投げ，首をくくり，自らを剣で刺し，毒を飲むと言い張ります。…ある者は結婚をちらつかせ，またある者はずっとめんどうを見てやるなどと言います。けれど目的を果たした後，女性の見るものは終わることのない恥と悲しみです。…男性は女性に対して処女性を失い自分の肉体に対して罪を犯したと責めますが，もし女性が男性を信じずにまた誓いの言葉にだまされることがなかったら，罪を犯しはしなかったでしょう。女性をたった一つの罪を犯したといって非難するあなたがた男性は，どれほど多くの恐ろしい罪を犯していることでしょう？…

この肉欲の罪をまず男性に誘惑される前に犯した女性がいたら，どうぞ教えて下さい。咎は男性にあるのです。…イヴが蛇の誘いがなければ罪を犯さなかったように，女性も男性の挑発がなければ罪は犯さないものなのです。」（"They know the flexible disposition of Women and,... some will pretend they are so plunged in love that except they obtain their desire they will seem to drown, hang, stab, poison,... Some will pretend marriage; another offer continual maintenance. But when they have obtained their purpose, what shall a woman find? Just that which is her everlasting shame and grief: ... Men may with foul shame charge women with this sin which they had never committed if she had not trusted, nor had ever trusted if she had not been deceived with vows, oaths, and protestations. To bring a woman to offend in one sin, how many damnable sins do they commit?... But I would have him, or anyone living, to show any woman that offended in this sin of lust but that she was first solicited by a man.... As Eve did not offend without the temptation of a Serpent, so women do seldom offend but it is by provocation of men."）

個人の犯した罪には社会にも責任があるという我々に馴染みの論旨が，男性と女性の関係に当てはめられているのはなかなか興味深いことだが，この Sowernam の論理にも Speght の場合と同じく，女性の貞節の強調がキリスト教の教義と結び付けられているのを見逃す訳にはゆくまい。それにしても Sowernam の，か弱い女性をだまして堕落させる男性への告発の時代を感じさせない何という迫力であろうか。

VI

Swetnam への女性による反論の三番手は，Constantia Munda であった。この偽名は「淑やかな貞節」（"elegant constancy"）と言う意味で，彼女の意図を表すものになっている。Munda のパンフレットの題は，『狂犬の寄生

虫駆除，あるいは地獄の門番ケロベロスへのスープ。コンスタンシア・ムンダによる女性のいじめ屋への論駁ではなく叱責。「見事な仕事は女性によってなされてきた。」』（*"The Worming of a mad Dog ; or, A Sop for Cerberus, the Jailor of Hell. No Confutation but a sharp Redargution of the baiter of Women by Constantia Munda : "Dux femina facti."*）という。今まで見て来た二つと同じく1617年に出版されているが，しかしこれは，Speght と Sowernam のものとその内容において違いがある。Swetnam のパンフレットに怒りを感じて書かれたことは同じだが，二人のように女性の弁護を一切せずに，全編が Swentam への怒りに終始しているからである。Munda の言葉は激しい奔流となり，止まるところを知らない。

献呈は詩の形で自分自身の「淑やかな知恵」という意味を持つ母親——Prudentia Munda——に対してなされている。Munda は自分を産み育ててくれた母親の愛と気遣いに感謝し，この書を捧げているのである。このような形で娘から母にあてられた献呈は，女性のライティングを考えてゆく際に興味深い問題を提起してくれるが，これについては Elizabeth Grymeston, Elizabeth Jocelin, Dorothy Leigh, Elizabeth Clinton などによって書かれた母から子に向けた "Mother's Advice Books" との関連で考えてみることもできるであろう。

本文はギリシァ語やラテン語を多く使って書かれており，また古典の引用もふんだんにあって，Munda の高い教育レベルが知られる。どこを取ってみても Swetnam と彼の『女性の糾弾』を非難する激しい言葉の流出がみられ，ルネサンスの女性のライティングにおける言葉の豊饒さがうかがわれる。自分に課せられている美徳である沈黙をあえて破る理由を次のように語る Munda の言葉を，ミソジニーの長い歴史が女性たちをいかに傷つけてきたのかについての男性への告発と考えるのは誤りではないだろう。——「けれども，悪人が支配し，勝利することのないように私たちは，あなたがこれ以上愚かにもあなたのこぶしを振り上げることのないように，

あなたの放埒なげんこつにかせをはめます。女性の慎ましさは私たちの成熟した心に沈黙——私たち女性は沈黙をこの上なく素晴らしい装飾品とみなしています——を強いるのですが，必要が生じた時「話すべきことを言わないのは，黙っているべきことを話す」ことと同じく重大な誤りで愚かなことです。このように弾劾され，苛まれ，全女性がてひどく評判を傷つけられた今となっては。」（"Yet lest villainy domineer and triumph in fury, we will manacle your dissolute fist, that you deal not your blows so unadvisedly. Though feminine modesty hath confined our rarest and ripest wits to silence, we acknowledge it our greatest ornament ; but when necessity compels us, 'tis as great a fault and folly "loquenda tacere, ut contra gravis est culpa tacenda loqui," being too much provoked by arraignments, baitings, and rancorous impeachments of the reputation of our whole sex.")

Munda のパンレットも Sowernam と同様 Speght に言及していて，Swetnam という男性の愚かしさに対する，女性連合を形成しているかのようである。——「さて，あなたの黒くにやついた口は，慎ましく，強い手により既に口輪をはめられました。その中では，あなたの信じがたい厚かましさとあまりの愚かしさが，賢明にも暴かれたのです。…彼女は，この野蛮な血に飢えた猟犬に立ち向かった最初の女性でした。あなたの狂犬のような毒を持つ歯がすべての無垢な女性を傷つけないように，賢明にもあなたの口をふさぎ，あごを封じました。」（"You see, black grinning mouth hath been muzzled by a modest and powerful hand who hath judiciously betrayed and wisely laid open your singular ignorance, couched under incredible impudence ; . . . But as she hath been the first Champion of our sex that would encounter with the barbarous bloodhound, and wisely dammed up your mouth and sealed up your jaws lest your venomed teeth like mad dogs should damage the credit of many, nay all innocent damsels ;)

また Munda はこうも毒づいている。「何人かの女性にひどいことをされ

たことが，女性のすべてに紙つぶてを投げつけなければならないことになるのですか？…どうしてあなたを傷つけた方に直接噛つかないのでしょう。…あなたの文章スタイルの蟹のように曲がった姿，ネジ曲がった味気無い文章は，貴方の体も貴方の心と同じく卑しいことを証明しています。」(“What if you had cause to be offended with some (as I cannot excuse all), must you needs shoot your paper pellets our of your potgun-pate at all women?... Why did you not snarl at them directly that wronged you?... that the crabbedness of your style, the unsavory periods of your broken-winded sentences, persuade your body to be the same temper as your mind.”)

Mundaは，このようにSwetnamをさらには女性蔑視の男性たちをやりこめてゆくのだが，彼女の途切れることなく流れて行く豊かな言葉を，女性論という枠組みを超えて，ルネサンス文学の中に位置付けて見て行くことも興味あるテーマであろう。

さて，最後に，ルネサンス期イギリスにおいて，男性の女性蔑視の言説——ミソジニー——に対して自らペンを執り，女性の貶められてきた名誉を回復するべく立ち上がった女性たちの戦いの意味について考えてみたい。彼女たちの繰り返し強調するキリスト教を基礎にした女性の貞節は，女性に特有の徳と考えられていた。そしてそれは家庭にあっては夫に従い，子供を生み育て，家族の中心として自己犠牲をも厭わず生きてゆく良妻賢母のイメージをその裏側に持っている。女性が自らを貞節と強調し，男性によって広められてきた性的に放縦な存在としての女性という規定の誤りをただそうとする戦いが，男性を女性の上に置き，男性を家の外へ女性を家の中へと固定化してゆく近代社会のイデオロギーとどこかで通底していたのだろうか？　もしそうだとすれば，それは，強いられた沈黙を破って語り始めた女性のライティングそのものが，こんどは男性によってではなく自らが自らを抑圧してゆくものに転化するという危険性を孕むことにな

るのである。

本稿は1994年6月25日（土曜日）の調布学園女子短期大学第一回公開講座における講演を，一部削除，加筆して論文の形にまとめたものである。そのため今回は注釈を付けることを省略した。話しにまとまりを持たせるため，「貞節」という問題に焦点をあて，実際のパンフレットの中身を紹介する体裁をとったが，勿論このルネサンスの女性たちによる女性論は，Rachel Speght を除く二人がはたして女性であったかどうかを始めとして，匿名，偽名の文化的意味を内包した問題を有している。宗教の問題も避けては通れない。

ここで論じた女性達の手になる女性論を扱ったものは，筆者の知る限りでは，次のものがある。（出版年代順）

criticisms :

1. Sandra Clark, *The Elizabethan Pamphleteers : Popular Moralistic Pamphlets 1580-1640* (East Brunswick, New Jersey : Associated University Presses, Inc.), 1983.
2. Linda Woodbridge, *Women and the English Renaissance : Literature and the Nature of Womankind, 1540-1620* (Urbana and Chicago : University of Illinois Press), 1984.
3. Elaine V. Beilin, *Redeeming Eve : Women Writers of the English Renaissance* (New Jersey : Princeton University Press), 1987.
4. Ann Rosalind Jones, "Counterattacks on "the Bayter of Women" : Three Pamphleteers of the Early Seventeenth Century" in *The Renaissance Englishwoman in Print : Counterbalancing the Canon.* eds., Anne M. Haselkorn and Betty S. Travitsky (Amherst : The University of Massachusetts Press), 1990.
5. Constance Jordan, *Renaissance Feminism : Literary Texts and Political Models* (Ithaca and London : Cornell University Press), 1990.
6. Akiko Kusunoki, "'Their Testament at Their Apron-strings' : The Repre-

sentation of Puritan Women in Early-Seventeenth-Century England" in *Gloriana's Face : Women, Public and Private, in the English Renaissance.* eds., S. P. Cerasano and Marion Wynne-Davies (New York, London, Toronto, Sydney, Tokyo and Singapore : Harvester Wheatsheaf), 1992.

7. Diane Purkiss, "Material Girls: The Seventeenth-Century Woman Debate" in *Women, Texts & Histories 1575-1760*. eds., Clare Brant and Diane Purkiss (London and New York : Routledge), 1992.
8. Barbara Kiefer Lewalski, *Writing Women in Jacobean England* (Cambridge : Harvard University Press), 1993.

editions :

1. Katherine Usher Henderson and Barbara F. McManus eds., *Half Humankind : Contexts and Texts of the Controversy about Women in England, 1540-1640* (Urbana and Chicago : University of Illinois Press), 1985.
2. Moira Ferguson ed., *First Feminists : British Women Writers 1578-1799* (Bloomington : Indian University Press), 1985.
3. Germaine Greer, Susan Hastings, Jeslyn Medoff and Melinda Sanson eds., *Kissing the Rod : An Anthology of Seventeenth-Century Women's Verse* (New York : The Noonday Press), 1988.
4. Betty Travitsky ed., *The Paradise of Women : Writings by Englishwomen of the Renaissance* (New York : Columbia University Press), 1989.
5. Copies of writings by early women writers from the Women Writers Project, a computer project (Providence : Brown University).

ここでは，*Half Humankind* と Women Writers Projet からのコピーを使用した。Rachel Speght のテキスト以外の引用は，現代のスペリングになっている。